

高橋國太郎さんとの沢山の思い出

日本生理学会特別会員

広島大学名誉教授（歯学部生理学教室）

元上越教育大学教授（障害児教育）

元広島女学院大学教授（管理栄養士）

現介護老人保健施設シエスタ医師

菅野 義信

新潟大学の耳鼻咽喉科の大学院を修了し、東京医科歯科大学の医学部生理学教室に奉職し、勝木、萩原両先生の許、最初の印象は土曜日午後の英語のセミナーだった。順番が私のところに来て、自分の学位論文の紹介を英語ですることになった。

セミナーには医科歯科の両先生の他、東大薬理の江橋教授、大塚先生、野々村先生、他檜橋先生に加えて、当時学生であったと思われる高橋國太郎先生が入っていた。これが彼と私の最初の出会であった。

英語があまり得意でなかった私にとって、全く、緊張の午後であったが、私の下手な英語発表を彼には丁寧に聞いて戴いた。1960年の梅雨時で、国会周辺が騒がしい頃であったが、ここでは第1、第2生理所属の皆さんと共に、ご自分の研究や、一部は最新英語論文の紹介等熱心に討論を行っていた。

この会が何時頃まで続いたかはっきりと覚えていないが、萩原教授は、間もなく北欧に出られ、ついでアメリカに渡られロスアンゼルスに落ち着かれたように記憶している。当時は一度結核になった人は、なかなかアメリカには入れない事情であった。1962年私自身がニューヨークのコロンビア大学に留学（私の場合萩原先生のご支持で職員として就職できたので大学の名簿に名前が掲載されている）した時、座席の背に聖路加病院で撮った原寸大の胸部X線写真を預ける荷物に入れずに機内に持ち込んでいた。萩原先生のVisaはH-1

であり、一般的な留学生はJ-1のVisaであった。H-1 VisaではX線写真がいらなかったようであった。

プロペラ機がやっとジェット機になり始めた頃で、ハワイに寄り、機外に出る時にはX線写真は手で持って出ていた。サンフランシスコに着いて、荷物を受け取る前に別室で写真を調べて、やっとアメリカ本土に入国出来た。当地の銀行に勤めていた小学校の同級生の世話になり、まずはアメリカの生活の仕方を習い、次いでアメリカの国内線で写真はもう荷物に入れてニューヨークへ到着した。厳冬期1月早々でも、どこもかしこも暖房が良く効いていて、東京の実家で引いた風邪も直ぐに良くなって助かったことが第一の経験で印象に残っている。

半年後の夏には家内と子供一人も貯めたドルで呼寄せすることも出来、ニューヨークでの生活は大変楽しかった。出身校の新潟大学の人達も何名かおり、当然、東京大学医学部、その他からの留学生にも親しくして戴き、誠に充実した研究生生活を送ることが出来た。4月には全米の生物学関連学会がフィラデルフィア近くのアトランティックシティで開催され、かなりの数の日本人留学生も参加され新潟大学の大学院で直接ご指導を受けた丸山直滋先生にもお目にかかることも出来、記憶があまり定かではないが、セミナーでお世話になった檜橋先生も来ておられたように思うが、西海岸の萩原先生はお出でにはならなかったように思

う。

当時の J-1 Visa の留学生は休職最大限の 2 年間程度の留学で帰国し、東京医科歯科大学に復帰した私には広島大学歯学部の初代教授の候補者のお話がありましたが、新学部が発足するまでには何年か掛かりそうで、研究の継続が困難であったので、1965 年の東京での国際生理学会後、再度コロンビア大学に準教授として渡米したが、単身赴任であったので、在米中の日本人研究者をニューヨークに次々にお呼びした。楠橋さん（旧制高校の上級生）、萩原先生も来て下さった。

1966 年 4 月には広島大学歯学部に赴任する必要を生じ、3 月末に帰国することにして、帰りには当時ラホヤに移っておられた萩原教授の許に立ち寄りことにした。国内線でロスアンゼルス空港に着いた時、何と出迎えてくれたのが高橋國太郎さん（以後親しみをこめてさん付けにしたい）であった。ロスからラホヤまで、飛行機なら上空へ上って直ぐに降りる体制になる 30 分くらいの距離であるが、彼は車で来てくれており、しかもラホヤの萩原研に来て、間もなくのことであった。まだアメリカでのドライブに必ずしも慣れておられないところをロスまで迎えに来てくれたのである。

私にとっては感激のアメリカでの再会であった。しかし、彼にとってはロスまでの長距離運転は初めてのことであったようで、たしか、未だ明るい頃の時刻であった空港の到着から、何と萩原先生の家に着いたのは 12 時を回っていた頃で、少しは遅くなるとは思っていたが、大分心配されておられたようだった。6 時間以上かかったようで、誠に、申し訳ないことをしたと今でも思っていて、忘れられない感謝の出迎えであった。

私自身は、どちらかと言えば、他人のお世話をするのは、あまり苦痛ではなく、毎年お一人は外国人の非常勤講師をお呼びして、学生に講義をして載っており、一日は殆ど必ず日本三景の宮島を案内して、今でも宮島に行くとき案内などを英語で考えていることに気がきます。一方、高橋先生は本当の研究者で、どちらかと言えば他人のお世話

は全て、研究を通してのことで、その点は私とはやゝ正反対のところがあり、学ぶことが少なくありませんでした。その高橋先生に、お世話になった人は私くらいのものではないかと今でも感謝しています。翌日、萩原先生はゆっくりと研究室、その他も案内して下さいましたが、高橋先生は夢中で研究に邁進しておられました。帰りは当然、ラホヤから飛行機でロスに行き、東京に着くなり、広島に赴任致しました。世話好きと言えば、幾つかの学会もお世話しましたが、西丸先生以後広島で日本生理学会をやってなく、私は歯学部所属ですから、銭場教授に、後何年でご停年ですね、お手伝いはしますから学会の世話など如何かと水を向けたことがありました。ところが、銭場教授はなんと他人の停年まで数えている奴がおると、学会のこと等全く無関心で、私の教授在籍中には生理学会を広島で開くことが出来ませんでした。

しかし、日本細胞生物学会は 1 回、発生生物学会は 2 度も開催することが出来、特に前者では、多くの生理学者をお招きしてシンポジウムを持つことが出来た。学会員以外の江橋先生、北里先生、高橋國太郎先生に加わって戴いたのは当然で、シンポジストの方々には「牡蠣船」での親睦会もして、大変、皆さんに喜んで戴きました。この時の学会には、今を時めく広川信隆先生が外国留学から帰られた直後で、印象的な電頭での演題を三つか四つ発表されたのを良く覚えている。

その後、高橋國太郎さんのホヤ（私の生で食べるのが大好きな）を使った研究は、細胞分化の研究そのもので、若し、臨床医であれば癌研究の第一線の医師となったことは間違いないと確信している。

奇しくも日本生理学会誌の巻頭言に彼が 57 巻（1955 年）11 号に書かれ、私とその少し前の 4 号に書いております。彼のような本当の学者を失って、ご冥福を祈ること切なるものがあります。

唯、どうしてか、ご家族様とのご縁が無かったのは、これも彼が学者、研究者、教育者一筋の生活であったためかと拝察しています。